平成３０年１２月３０日（日）

老球の細道４５５号

１２月の言葉

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

シェークスピアは「最後に笑う者が最も良く笑う」と言ったそうであるが、私は最後は苦笑いで終わりそうだ。まだまだやりきれなかった１２月だった。宿題が残った分、また来年もがんばれる。年末年始、いつもと違った過ごし方になりがちであるが、いつも以上に規則正しい過ごし方をして新年をスタートしたいものである。

１・ウインターカップから

◆「リードがスキになることがある。０対０で行け」「バスケットに真剣に向き合っていれば人間としてもしっかり力がついてくる」〈ウインーカップ女子優勝岐阜女子監督・安江満コーチ談話〉

安江コーチは私と同年代のコーチであり、同じチームで 40 年以上指導に携わり、ようやく全国のトップ舞台の常連になってきた。涙を浮かべながらインタビューに応える姿は羨ましいかぎりである。歓喜の涙を流すことのできる人生ほど幸せなものはない。

◆「バスケットボールでやり過ぎても怒られないことをがんばれ。リバウンド、ルーズボール、デイフェンス、走る！」〈福島南高校監督水野コーチ談話〉

コーチはプレイヤーを鼓舞するためにたくさんの言葉を持たなければならない。コーチは情熱と言葉で勝負する。最近痛感することである。名コーチはバスケットボールのみならず人生の箴言をたくさん携えている。

２・トステイン・ロイブルからの新年メール

◆「Never regret a day in your life.The good days give you happiness and the bad days give you experience.」：常に前向きな姿勢に感化させられる。

３・新聞、雑誌のコラム等から

◆「教育方針ではいつも“子どもには時間、空間、安心感を与えろ”と繰り返していました」〈朝日・おやじのせなか・歴史学者磯田道史〉

子どもに与える「三つの“かん”」。孫守りの中で実践してみたい。バスケットボールのチームオフェンスで大切なことは「三つの“間”」。空間（スペーシング）、時間（タイミング）、仲間（チームワーク）。

◆「素晴らしい生徒がいると、名コーチになるのは簡単だ」〈朝日・テニス大坂なおみのコーチ・サーシャ・バイン〉

大阪とバインコーチの対等な関係性が注目を集めている。大阪にとっては友達みたいな存在でありながら絶対的な信頼を寄せる。選手のおかげでコーチがあるという謙虚な姿勢を忘れないからだ。コーチのおかげでチームが強くなったと錯覚する迷コーチが多い。

◆「役立つ人だけがいいのではない。困らせる人は己を磨く上で必要だ」〈朝日・樹木希林と友人の会話から〉

コーチの話を聞かない子ども、コーチの批判をする保護者、休日に家庭サービスをしないで部活に行く夫をなじるコーチング未亡人。コーチを困らせる人はどこにでも存在する。独特の死生観で多くの共感を呼んだ樹木希林さんが、仕事の共演者と合わなくて愚痴っていた時に、友人が釈迦のこの言葉で励ましていたという。